

---

## 親愛なる赤い月へ～悪友代表ユウより

Dear

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

親愛なる赤い月へ〜悪友代表ユウより

### 【Nコード】

N7638B

### 【作者名】

Dear

### 【あらすじ】

俺の人生で、靈感があつて一番良かった事・・・それは、貴方に再び会えた事・・・作者とその悪友が体験した実話です！

**（前書き）**

貴方が亡くなり、もう五年と少しだけ時間が流れたんですね？

本当に早いです・・・

中学三年

それは、俺にとって忘れられない時代

そして、あの日の俺は確か高校受験の真っ最中で、精神的にも肉体的にも疲れ果てていた時だったと思う．．．

塾が終わり、俺は帰宅準備をしていた

最近、何もかもうまくいかないとへこんでいたんだよね？

勉強も恋愛もうまくいかないと．．．

電車に乗る為に駅へと向かった俺は、塾の近くにある小さな橋の上の真ん中で溜め息を吐いて空を眺めた

俺は動けなくなった

そこには、真っ赤な満月が俺を見つめていたんだ．．．

不吉

最初はそう思った

だけど、次の瞬間に俺は何故か涙を流している事に気付いた

赤い月に対して．．．

何故？涙が止まらない

「君は誰なんだ？」と俺は無意識に赤い月に尋ねた．．．

自分が言葉に出した内容に俺は驚いたが、相変わらず赤い月から目を放す事が出来ない．．．

赤い月は答える事は無く、優しく俺を照らし出してくれた

一週間後

学校の昼休み

いつもなら俺は悪友の教室に遊びに行くのだが、珍しく悪友のオグが俺の教室に飛び込んで来た

「ユウいるか？」

「あれ？オグ！どうした？珍しい．．．」

「落ち着いて聞けよ．．．おじちゃんが．．．富士のおじちゃんが死んだ．．．」

富士のおじちゃん

彼は俺ら悪友の最も年の離れた友達であり、三人目のじいちゃん的な、あるお店の店主である

「何て言った．．．今、何て言ったオグ．．．嘘だろ？なあ！オグ！」

「嘘じゃねえよ．．．むしろ嘘であって欲しいよ．．．二か月くらい店を閉めてたろ？おじちゃんな？癌で入院してたんだ．．．一週間前に亡くなったらしいんだ．．．」

一週間前？

俺はその言葉を聞いて初めて気付いた

あの赤い月が、別れを伝えに来たおじちゃんだった事に．．．

当時、周りより靈感が強かった俺に別れを伝えに来たんだと．．．

それから俺は、ヘコんだ時やおじちゃんの命日に赤い月を見るよう

になった

優しくったおじちゃんが心配で励ましに来てくれていたんだと思う  
．．．

だけど残念な事に、俺は少しずつ靈感が無くなっていき、赤い月を見る事が出来なくなっていった．．．

でもね？おじちゃんは俺らを守ってくれていたんだ．．．

俺が大学一年の時だった．．．

悪友のセノの家に悪友のゾンと泊ったんだ

彼らもおじちゃんには良くして貰った仲であり、今も一緒に線香をあげに行く仲である

俺はセノの家に泊ると朝方まで遊ぶので、夕方まで寝てしまう

だが、あの日は全く違った．．．

夢を見たんだ

夢の中で誰かが優しく俺に語りかける

「もう、起きないと駄目だよユウ君？」

そう言うと、眩しい程の赤い光が俺を包み、優しい手に頭を撫でられた

俺は飛び起きるとセノとゾンはゲームをしていた・・・

「セノとゾン？誰か俺を起こした？」

「ん？いや起こしてないよ？なあ？ゾン？」

「ああ、起こしてねえよ？ユウは起こすと機嫌悪りいからな！」

誰も起こしてない

でも何だろう・・・物凄く嫌な予感がするんだ・・・

俺は隣りに座っていたゾンに言った

「何か、物凄げえ嫌な感じがするんよ？今日はもう帰らん？」

「ん？分かった！ユウの嫌な感じは当たるからな？」



俺らはセノの家を出ると自転車に乗った

「ユウって靈感無くなったんじゃないっけ？」

「ああ、ほとんど無くなった．．．でも、何かヤバい気がするんよね？」

「そっか！地震でも起こらなけりゃいいけどな？」

そう言っただけでゾンは分れ道で手を振り家に帰って行った

俺は急いで家へと自転車を飛ばした

家まで後、5分〜7分くらいの所まで来た

目の前の信号が点滅を始めたので俺は渡ろうとしたその時だった．．

「待ちなさいユウ君？」

夢で語りかけた声がまた聞こえた

俺は反射的に止まり、信号は赤になった

そして、その時に気付いた・・・

その優しい声の持ち主がおじちゃんに似ているのに・・・

信号が青になり渡りきった次の瞬間だった

## 福岡西方沖地震

大きな揺れに自転車は蛇行運転になり、信号機は命を与えられた蛇のように動き、突然の大きな地震に周りはパニックになった

揺れが小さくなると俺は急いで家へと向かった

だが、帰り道で思わず止まってしまった

恐らく、あの時に俺が信号を渡って、真っ直ぐ家に帰っていたら・・・

目の前に落ちている工事中の建物の破片が頭に落ちて来ていたのだろぅと・・・

その破片は落ちて割れて二つになり、無残にも容易に人の命を奪う事が出来ると理解出来た・・・

間違いなく俺は死ぬところだったのだろぅ・・・

おじちゃんが止めてくれなければ・・・

だが、俺は更に知ってしまったのだ

それは、家に帰って一時間くらい経った時

セノが携帯電話の回線がパンク中に奇跡的に俺に電話をかけて来たのだ……

「ユウ！無事か！」

「まあな？何とか怪我もなく生きてるよ？」

「お前の嫌な感じが当たったな？ユウとゾンが俺の家いたらヤバかったんだぜ！」

俺は内容を聞いて血の気が引いた……

俺が寝ていた所とゾンが座っていた所

そこに、セノの部屋に飾っていた物が全て落ちて来たのだという

ガラスは砕け散り、重いトロフィーなども落ちたらしい……

セノも俺らが帰った後に一階にある居間に居た為に奇跡的に怪我はなかった……

おじちゃん

ありがとうね？

本当にありがとう！

俺ら三人は命を救われたんだね？

今ではやっぱり赤い月が見れなくなつた

靈感消えちゃつたからかなあ．．．

でもね？まだ守つてくれてるんだよね？

この間、この小説を書こうか悩んでいた時

久しぶりに会いに来てくれたよね？

親愛なる赤い月へ

俺らは今でも馬鹿ですがこんなにデカくなれました！

だから安心して下さい！

そして、寂しくなつたらたまに顔を見せてください！

今でも大好きなおじちゃんへ

悪友代表ユウ

（後書き）

いかがでしたか？

これは作者とその悪友が体験した実話です

ジャンルは怖くないのでホラーにはしませんでした

評価をいただけるとありがたいです

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7638b/>

---

親愛なる赤い月へ～悪友代表ユウより

2010年10月10日23時39分発行